
ダイヤモンドヴェール ーノンカット版ー

B u g o m i e l

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイヤモンドヴェール ノンカット版I

【Nコード】

N5963Y

【作者名】

Bugomiel

【あらすじ】

「エリートビジネスマンの不倫マネジメント」の登場人物が、舞台をパリから東京に移し、六本木ヒルズや東京ミッドタウンのシーンを始め、その後のストーリーを展開する。

R15

六本木ヒルズ

彼は、六本木ヒルズのタワーのエントランスから出て来た女性が、背中にかかった髪を、時おり風になびかせて歩いてくるのを見ていた。

少しカールした毛先が、歩きたびに背中で揺れている。

黒のラップドレスは、スリムな体型と胸のふくらみを強調して風を受ける。

背筋を伸ばしてまっすぐに歩く姿は、たとえようのない美しさと言っても過言ではないと思う。モデルウオークほど脚をクロスさせているわけではないが、まるで目に見えないラインの上を歩いているように、優雅に空気と一体化していた。

彼女は入口につないであった、小さな犬に向かって微笑むと、顔をあげ、彼を見つけて柔らかく笑う。

「隆之さん」

「君を待たせなくてよかったよ、栞」

「迎えに来てくださったの？ まだお疲れなのに」

隆之の妻は、彼の腕に滑り込むように両手を絡ませた。

「あんな愛らしい顔で微笑むから、みんな君に見とれていたよ」

「あそこにつないであった犬と目が合ったの。ほんとに可愛い目で私のこと見つめるのよ」

「一応戸外ではあるけど、ヒルズのプラザに、犬つてつないでいいの?」

「コマールシャル用なのよ。ほら、期間限定のカフェスペースが、今はiPhoneカフェになってるでしょう。もちろん、本物の次郎さんじゃないけど」

そういえば、TVでよく見かける、赤い首輪の白い北海道犬に似ている。

38歳の織田栞おだしおりは、大人の魅力で包まれてはいたが、雰囲気はあどけなさを残していた。
聡明さの際立つ隆之たかゆきよりは、ずっと年下に見えたが、本当は三つ年下なだけであった。

「ふふふ、本当はね、あなたと一緒にいるときのほうが、注目を集めるのご存知だった? 私が、人に見られるの、お気に召さない?」

「いや、そんなことで僕は嫉妬なんかしない。むしろ、いいことだと思うよ。人に見られることによって女性ホルモンが分泌されて、君はますます美しくなる」

(それに君は、無邪気そうに見えて、危ない男は寄せ付けない術を心得てるから)

こうして話している間も、若いビジネスマンが、栞にさりげない視

線を向けて、視線が合わないように隆之にも目を向ける。

二人が注目を集めているのは事実だが、おそらく誰もが、自分自身を一番美しいと思っているのではないか、ここはそういうスノッビ―な雰囲気を満たした空間だった。

栞は指を伸ばして、くぼみのできた鎖骨に流れるダイヤモンドのネックレスにさりげなく触れた。

「今日の視線は、あなたにいただいたネックレスのおかげじゃないかしら」

パリのChaumetで、隆之が栞のために買ったものだ。

栞の身につけるものを選ぶセンスの良さは、隆之に備わった才能のひとつだった。

栞の誕生日プレゼントを兼ねての贈り物である。

この程度のもは、いつも妻に贈っている隆之だったが、今回はなんとなく後ろめたさを感じていた。

(別に、これは『あのこと』の埋め合わせのために買ったわけじゃない…)

栞は、海外在住の日本人のために、日本のトレンド情報を伝える小さなコミュニティ誌に記事を書いていたが、自分より夫のほうが情報通なのは明らかだった。

もともと、栞の仕事は、主婦業のかたわら、パートタイムで少しだけ携わっている程度の仕事で、

それに比べて隆之は、彼の会社でいつどのような産業に関わるかもしれないなかったから、常にアンテナを張り巡らせており、もともと規模が違う比較だったが……

「ほんとに小さなコラムなの」と本人が言つとおりで、月刊誌だったから、仕事にそれほど時間は取られない。

子供たちの学校の行事にも欠かさず参加していたし、料理も熱心な菜だった。

土曜日、菜はヒルズに新しくオープンしたカフェを紹介する取材で、ここを訪れていた。

この後、ピアノのレッスンをしている13歳の娘、薫とサッカー教室に参加している11歳の息子、祐紀ゆつきを迎えに行く予定だった。

おととい海外出張から帰って来たばかりの隆之を気遣って、彼を家に残して来た菜だが、こうして迎えに来てくれたところを見ると、もう疲れが癒されたようだった。

ヒルズのプラザ広場は、行き来する人で賑わっていた。

広場を囲む壁のように張り巡らされた噴水は、ときどきレース模様のような白い泡を立てて壁の上を静かに流れ落ちる。

まるで自分が宇宙へ吸い込まれて行くようなおもむきがあった。

巨大な蜘蛛のオブジェの下で、菜が立ち止まる。

「あ、待って、子供たちの好きなバゲットを買って行かなくちゃ。

お昼はスモークサーモンのサラダを作るつもりなの」

彼女は、隆之の腕から手を外して、遠慮がちに彼の手のひらに指で触れた。

（人目を気にしているの？ そんな必要ないよ）

隆之は、彼女の手を取って指を絡めながら、ベーカリーへと足を向ける。

（あなたといると羨望のまなざしを向けられるのが、嫌いじゃない
… むしろ誇りに思うわ）

栞は、愛する夫と手をつなぎながら、この上ない幸せを感じていた。

六本木ヒルズ（後書き）

ご存知のように六本木ヒルズはギャラクシーのテリトリーです。で、プラザのカフェスペースがiPhoneカフェになることは、現実にはまずありえないことでしょう。

ヨーロッパの経済不安

「パパ」

13歳の薫は、最近ずいぶん大人っぽくなって、リビングルームで本を読んでいる隆之の注意を自分に向けるために、小さな手で彼の長い前髪をかきあげたりする。

「世の中は不景気なのに、どうしてパパはママにダイヤのネックレスを買ったりするの？ ボーナスだって、会社全体が伸び悩んでるって言ってたじゃない。株式投資が、そんなにうまくいってるの？」

「そんなに儲かってないよ。むしろ、地合いの影響でさんざんだ。でも不景気だから、あえて景気を活気づけるためにお金を使っている。特にヨーロッパは財政難だから。強いて言えば、困ってる人にお金を寄付すると、根本的には同じようなことだ」

「寄付とは、なんかちょっと違うような気がするけど……　つまり、経済の活性化を計るってこと？」

「…まあ、そういうこと。」

「それから、薫が経済に興味があるのなら、知っておくべきだけど、僕が株に投資しているのは、金儲けのためだけじゃない。日経平均や海外株式の動きを見てみると、世界の人々の反応がよくわかる。東日本大震災からは立ち直りが見えたのに、ヨーロッパの経済問題に対する反応で、また株価が下落している。つまりそういうときは、世の中の人々が世界経済に不信を抱いてるってことだよ。そういう情報は、パパの仕事の役に立つ」

「ふうん。でも、もし、円高が緩和されれば、売り上げはもっと伸びるのにね」

「僕は、永田町の政治家が、株価の反応に注目してないんじゃないかとさえ、思えるときがあるね。残念なことだ…」

隆之はソファに座り直して娘の顔を見た。

「どうして、そんなに詳しいの？ 学校の先生がそう言ってたから？」

「もちろん、自分の考えよ！」

そこへ、栞がサラダを運んで来て、ダイニングテーブルに準備を始める。

「薫の意見だと思っわ。先生がいつも、この子の質問で困らされるそうだから」

隆之は、どうして自分の周りには、強くて頭の良い… ちょっと頭が良すぎるくらいなの、女の子が多いのだからと考えていた。

栞が薫にそれとなく促す。

「先生を困らせないように、質問したり意見を言ったりできるのよ。そのほうが、大人だとおもわない？」

「どついたらいいの？」

ドレッシングをまぜて、母親がサラダを取り分けるのを手伝っていた祐紀が、ちゃっかり姉にアドバイスをする。

「ママみたいにすればいいんだよ。人に優しく接してるのに、自分の意見をちゃんと伝えて、しかも相手を思い通りにできちゃうんだよね」

確かに、祐紀の言う通り、栞は優しく人当たりがいいが、それでいて物事を自分の思い通りにしてしまう才能を持っていた。

夜のとばりの中、外では雨が降っていた。

隆之の腕の中で静かに眠っている栞に、思わず口づけたくなるのだが、妻を起こしたくなかったので、隆之はそっと彼女の波打つ髪にキスをした。

さっきまで、彼に抱かれながら艶っぽい声を出していた彼女が、疲れ果てて眠っている。

寝息も聞こえないくらい静かな、深い眠りの中にいた。

（僕は…… 栞を裏切った罪を償うために、何をしたらいいのか。

いや、それよりも、償う方法が、一体あるのだろうか、あれからずっと思い悩んでいる。

この罪は、僕をパリまで追いかけて来た女の子、佐伯^{さえき} 悠宇里^{ゆうり}のせいではない。そうすることを、決めたのは自分だ。責任はすべて僕にある。

あの子はまだ24歳……

結局、僕にしたことは、どんなことをしても償えないあやまちなのだ。

僕は、この世で一番愛する女性、栞に、過去に起こった出来事の、嘘をつき通すという苦しみを、これからずっと背負って行かねばならない。

彼女を悲しませないためには、絶対に知らせてはならない。それが、僕にただひとつ残された償い……

だが、栞を裏切れることは二度と無いと、僕は誓う。

ヨーロッパの経済不安（後書き）

隆之は自分の責任だと言っていますが、実は彼をパリまで追ってきた悠宇里の責任も大きく、彼は決定権を持つものとして、（後悔と言っわけではなく）自分を責めています。

詳しくは「エリートビジネスマンの不倫マネジメント」をご覧ください。
さい。

東京ミッドタウン

乃木坂寄りの六本木にある隆之の自宅からは、横浜支社に通勤するより、東京本社に出社するほうがずっと便利だった。

だが、また東京の本社に通う日も、そう遠くない。

彼が半年前に、東京本社の課長から横浜支社の企画部長に栄転になったとき、会社の経営者から、1〜2年間、横浜支社の経営を、事実上一任すると言われた。

支社長は海外出張が多く、強力なアシスタントを必要としていた。

いわば企画部長 兼 支社長補佐だったが、過去に例がなかったので支社長補佐の部分は公にされず、権力だけが与えられていた。

もちろん、支社長とその上層部は承知していたから、隆之の意見は優遇されていた。

そして彼の成績が良ければ、数年後、東京本社の相当な権威のある地位につけると約束されていた。

横浜支社の経営は順調に行っており、彼は週に一度、東京本社を出張で訪れていた。

- - -

その日、隆之は帰国後始めて、東京本社の営業部に顔を出した。

何事もなかったように装ってはいたが、悠宇里は少し痩せたようだった。

肩にかかる波打つ髪も、心無しか輝きが少ないような気がする。

最後にパリで別れてから、6日しか経っていなかったけれど、隆之の目には変化が明らかだった。

彼が休憩室の前を通りかかると、若い女子社員がみんなにお菓子を配っていた。

「あ、部長もおひとついかがですか？」

そう言つて、女性社員は隆之に九州の銘菓を差し出す。

「ああ、ありがとう。誰かのお土産？」

「佐伯さんです。先週、九州の温泉に行つてたんです」

「ね」と彼女は悠宇里を振り向く。

隆之は、いきなり咳き込んだ。

先週と言つのは、彼がパリに出張していて、悠宇里がそれを追いかけてきた週のことだ。

「へえ、君…九州に行つてたんだ」

「ええ」

人が大勢いる休憩室なので、平静を装う悠宇里と隆之だった。

二人で一緒に過ごしたことを、悠宇里がカモフラージュしてくれているのだが、かなり身に応じているのに、こんなに何気なくしてい

られる彼女が、むしろミスティアスだった。

- - -

その日の夕方、隆之と朝倉^{あさくらひろき}広樹は、東京ミッドタウンの檜町パーク
が見渡せるレストランバーにいた。

外では、広い芝生の上で、夜空に虹をかけるイベントが行われてい
た。

噴射する霧や水しぶきに、カラーレーザーを照射して、虹と星のシ
ヤワーを演出する。

霧の花火が打ち上げられると、人々がきゃあきゃあ叫び声を上げて、
まるで子供に帰っていた。

シヨットグラスを傾けながら、隆之がたずねる。

「…で、彼女は、九州に行ったことになってるわけ？」

「そうです。一週間ずっと有休を取ってたので、何か理由が必要だ
ったんです。お土産なんて、今時ネットでも、羽田でも、どこでも
手に入りますから…」

「ふうん……」

「もうそのことには触れないで下さい。なんか、恥ずかしくなって

くるから。疲れてたし、他に理由が考えつかなかったんですよ。パリから帰って来たばかりで」

「恥ずかしがる必要はないと思うが……で、朝倉はどんな理由になってるわけ？」

「僕は二日しか休んでないんで、誰も僕のことなんか気にしてません」

「彼女、あれから大丈夫だった？」

「……なわけないでしょう。パリにいた間は、あまり食べ物喉を通らないみたいでしたよ。必死で元気そうに装ってたけど……帰りの飛行機が一緒だったから、僕が家まで送り届けました」

「……ありがとう」

隆之は、いつも食欲旺盛だった悠宇里を思い出して、彼女の心の傷がどれほどかと思いつく。

職務命令とはいえ、彼女一人をパリに残して帰国するのは、無責任だと思っていた。

ちよつとそこへ、広樹が現れて、悠宇里を見守ってくれたのだ。

「かわいいそうに……ずっと心配していた。僕の責任だから」

「まだ、彼女のことを好きなんですか？」

「どついう『好き』って意味かによると思っけど。菜より愛してい

るという意味ではないのは確かだ」

「そもそも、比べる対象じゃないでしょうね。妻であり母親であり…… 社会的な役割を果たしている女性と……」

別に、悠宇里が悪いつて言ってるわけじゃなくて…… 彼女は、独身の若い女性の役割を果たしている。それはごく当然のことだし……」

隆之が何か言いたそうだったので、広樹はすぐに言い訳をする。

「あの…… 僕は、独身の女性の社会的地位を認めてないとか、そういう観点で話してるんじゃないよ。今の発言は、女性の前では絶対に言いません」

「営業担当らしく、多角的なものの見方ができるようになってきたね」

広樹は、グラスの中の氷が溶けるのを見ながら、遠い目をする。まるで氷の中にパリの風景を見ているかのよう……

「まあ、行き着くところまで行かなければ、悠宇里の気が済まなかったらどうかっていうのも、何となくわかります。

僕は、彼女にまだ告白してないんだから、何も言う権利はありません。裏切られたわけでもなんでもないし……」

「何か想像してるらしいけど、そういう事実は無かったことを、忘れないで欲しい」

(あくまで、言い張るんですね)

広樹の見透かすような目に、今度は隆之が心の中で言い訳をしてい

た。

(それが目的でパリまで来た彼女に、もし、何もしなかったら、悠宇里のプライドを相当傷つけただろう。それは僕の、ただの都合のいい自己弁護かもしれないけれど…)

「彼女を傷つけないように、守ってあげてくれないか？」

「一番傷つけてるのは、部長じゃないですか」

「それだけは、どうしようもない……」

悠宇里を幸せにするために、僕にできることは、彼女に僕を忘れさせることだけだ。

お前には、もつとたくさんできることがある」

「それって、僕、彼女のお相手として部長に認められたってことですか？」

「まだ、お前が選ばれるとは限らないよ。他に男はいくらでもいる」

広樹は嬉しそうに口角を上げて、隆之を見た。

「部長は、お気に入りの人にだけ、そういう意地悪な口調になるんですよね」

「幸せな奴だな、ほんとに。まあ、朝倉が悠宇里を迎えに来たのは、ポイントが高い。彼女がパリに来ていることを見抜いたのはお前だけだ。悠宇里も、自分のことにそれほど関心を持ってくれた男のことは、きっと忘れないだろう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5963y/>

ダイヤモンドヴェール ノンカット版ー

2011年11月20日19時45分発行